

ペンタゴンの信念：世界を征服しない限りアメリカに安全 はない

【訳者注】アメリカの正体が誰の目にも、おぼろげに見えてきた現在、我が国の安保論議は、あたかもこの必要悪の悪だけに集中しているような感がある。確かに、この「ペンタゴン報告」の解説を読むと、我々がたいへんな相手と同盟を結んでいることがわかる。ロバーツに言わせれば、これは「ネオコンの垂れ流したクソ」にすぎないが、いかに狂気じみているとはいえ、大まじめな報告だから、日本政府も大まじめに取り組まねばならない。これは「従僕国」であるべき日本を特に意識しているように読める。彼らから見れば、日本のヘンなプライドが気になるというところであろう。先月初めの、おそらく半強制による、屈辱的な安倍首相のキエフ訪問も、ここでいう「国際的規範」すなわちワシントンの権威に背くような、変な気を起こすなという釘差しと受け取れる（6/29 記事参照）。しかしこれは、主権国家のプライドなどというものを乗り越えた問題であり、我々は同盟者だからといって、あなた方の犯罪に加担はできないということである。政府や議員やメディアは、このペンタゴン報告をよく見極めた上で、行動していただきたい。

By Paul Craig Roberts

July 10, 2015 (Information Clearing House)

ペンタゴン（米国防総省）が「[米合衆国国軍戦略 2015](#)」を 2015 年 6 月に発表した。

http://www.informationclearinghouse.info/2015_National_Military_Strategy.pdf



この文書は、焦点が、テロリストから「国際的規範に挑戦する…国家行動者」へ移ったことを物語っている。これらの言葉が何を意味するのかを理解することが重要である。国際的規

範に挑戦する政府とは、ワシントンの政策とは独立に政策を推し進める主権国のことである。これらの「修正主義国家」が脅威であるのは、彼らがアメリカを攻撃する計画をもつからでなく——ロシアも中国もそういう意図は持たないとペンタゴンは認めている——彼らが独立しているからである。

ポイントをちゃんと掴んでいただきたい——脅威は、その独立した行動のために「修正主義国家」であるような、主権国家の存在である。言い換えると、彼らの独立とは、独立行動はワシントンだけの権利だと宣言するネオコンの“単独権力”主義と、足並みを合わせないことである。「歴史」によって与えられたワシントンの覇権は、いかなる他国であれ、その行動が独立していることを許さない。定義によって、ワシントンから独立した対外政策をもつ国は、脅威となる。

このペンタゴンの報告は、一番の「修正主義国家」はロシア、中国、イラン、それに北朝鮮だとしている。焦点は第一にロシアに置かれている。ワシントンは、中国がその影響下の領域の防衛によって「アジア・太平洋地域の緊張」をつくり出しているにもかかわらず、中国を協力関係に引き入れようとしている。これは「国際法に違反する」防衛で（この言葉が国際法の大違反者ワシントンから出ている！）、アメリカの消費者市場として残っているものを中国へ組み込むものだという。イランについては、ワシントンがイラク、アフガニスタン、リビア、シリア、ソマリア、イエメン、パキスタン、および連帯によって、パレスチナに課した宿命を、免れたのかどうかまだはっきりしない。

ワシントンの声明はすべてそうだが、このペンタゴン報告の偽善のふてぶてしさは、あきれられるばかりで、ワシントンとその従僕国は「紛争を未然に防ぎ、主権を尊重し、人権観念を高めることに献げられた、確立された制度と過程を支持するものである」と宣言している。この言葉がどこから出たのかと言えば、それは、クリントン政権以来、11か国の政府を侵略し、爆撃し、転覆し、何百万という人々を殺し、追い払い、現在ではアルメニア、キルギスタン、エクアドル、ベネズエラ、ボリビア、ブラジル、そしてアルゼンチンの政府の転覆を図っている、ある政府の軍当局から出た言葉なのだ。

このペンタゴン文書ではロシアが攻撃されているが、それはこの国が「国際的規範に従って」行動しないからであり、その意味は、ロシアが、ワシントンのリーダーシップに従って、従僕国として振舞わないということであり、“単独権力”はそれを要求する権利があるということである。

言い換えれば、これは、ロシアとの戦争を誘発するために、ネオコンが垂れ流したクソのような報告である。

このペンタゴン報告について、この外に言えることはない。それは戦争また戦争を正当化し、ついに誰もいなくなることを目指すものだ。戦争と征服がなかったら、アメリカは安全ではない。この核ハルマゲドンへの道は、アメリカ人とヨーロッパのワシントン従僕が、連日、西側売春婦メディア（Western prostitute media）によって、頭に叩き込まれているものである。「戦争が我々を安全にする！」

ワシントンのロシアに対する見方は、（古代ローマの）大カトーのカルタゴに対する見方と同じである。大カトーは、ローマ元老院での題目を問わずすべての演説を、「カルタゴは滅ぼさねばならない」という言葉で締めくくった。

このペンタゴン報告は、ロシアが、ヨーロッパのあらゆる国、またカナダ、オーストラリア、ウクライナ、そして日本のような、従僕国家になることに合意しない限りは、ロシアとの戦争が我々の未来になることを告げるものである。ネオコンの確信するところでは、そうしないとアメリカ人は、他の国々がワシントンから独立して決断する世界では、とても我慢して生きていけないのである。もしアメリカが、世界に向かって命令する唯一の“単独権力”になれないくらいなら、我々すべてが死んだ方がましだということである。少なくとも、それがロシアに対する見方である。

（ポール・クレイグ・ロバーツ博士は、かつてレーガン大統領の閣僚（経済政策担当財務次官補）として米政府の中枢にいた。レーガンとともにロシア（ソ連）との関係改善を進めたが、後の諸政権がすべてをぶち壊したと彼は述懐している。「ウォールストリート・ジャーナル」共同編集長、「ビジネス・ウィーク」「スクリップス・ハワード・ニュースサービス」および「クリエイターズ・シンジケート」のコラムニスト。多くの大学から講義を依頼され、彼のインターネット・コラムは世界的にファンを引き付けている。最近著として、*The Failure of Laissez Faire Capitalism and Economic Dissolution of the West*, および *How America Was Lost* がある。）